

デジタル日記でいいところみつけ！

写真を使って掲示物を作ろう&プレゼンテーションしよう

高橋伸明* 1

児童が、デジタルカメラで写した写真を使って朝・帰りの会でスピーチをしたり、その写真にプレゼンテーションソフト等を使ってコメントを付け、教室へ掲示したりする活動を一年間継続した。その結果、映像リテラシーやプレゼンテーション能力の育成に成果が見られ、さらにお互いの存在感を大切にしながらよりよい人間関係を築こうとする学級の雰囲気も現れてきた。

<キーワード>人間関係づくり、映像リテラシー、プレゼンテーション能力、マルチメディア

1 はじめに

第5学年担任としてスタートした平成12年度（前任教：笠岡市立金浦小学校）の学級経営案を作成する5月、「児童の実態に見られる課題」とそれに基づいた「育てたい児童像」を、以下のようにとらえていた。

児童の実態に見られる課題

(学習面)

- ・教師や友だちの話を集中して聞く習慣
- ・文章の内容を読み取る力や自分の思いや考えを表現する力
- ・自分の考えを分かりやすく伝える力
- ・友だちの考えを生かしたり比較したりしながら話し合いを深めていく学習形態

(行動面)

- ・学級全体のことを考えて自発的に行動
- ・協力して活動を盛り上げていこうする
- ・男女間の交流
- ・グループ作りの際の要配慮児童

在籍21名（男子11名 女子10名）

育てたい児童像

- ・自分の考えを進んで表現できる児童
- ・友だちの考えや気持ちが分かる児童
- ・共に学び合い共に高め合える児童

育てたい児童像を実現するためには、言葉を換えれば「よりよい人間関係を築くこと」「伝

えたいことを相手に分かりやすく伝える力を育てること」が特に重要であると考えた。よりよい人間関係を築くためには、それぞれの児童が友だちや自分のよさを知ることが必要である。またこれは、伝えたいことを相手に分かりやすく伝える活動によって実現されるものでもある。

こうした状況をふまえ、後述する「デジタル日記」という活動に取り組むことにした。コンピュータ等の情報機器によって処理したデジタル情報は、簡単に付加・修正ができるので、継続的に取り組む教育活動には大変有効である。そして、伝えたいことを文字、映像、音声などの多様な情報にして、組み合わせることもできる。児童の何気ない日常生活の営みに特別な価値を付加したり、教育的な効果を高めたりすることができるのではないかと考えた。

本研究は、マルチメディアを活用した日々の地道な活動を通して、どの学級にもありがちな諸課題の解決を目指した取り組みである。

2 研究の目的

デジタル日記の活動を通して、児童同士のかかわりを深める。また活動の自己・相互評価を通して、共に考えたり喜びを共有したりする場づくりを行う。このことが、学級経営を円滑に進めるために必要な、よりよい人間関係づくりの一助となるかどうかを考察する。また、自分の思いや考えをまとめたり相手に分かりやすく伝えたりする力を育成するために、コンピュータ等の情報機器を活用した本実践が有効かどうかということも考察する。

* 1 岡山県笠岡市立中央小学校 (nob-taka@mx1.tiki.ne.jp)

3 研究の実際

(1) 実践内容

表1 「デジタル日記」の主な学習活動と指導上の留意点

学習活動	機器教材教具	指導上の留意点
<p><休憩時間等（毎日）></p> <p>(1) 一人一人の児童が学校生活の中で「がんばったこと」「友達と協力して取り組み成果が上がったこと」「友達のよいところ」等を見つけ、デジタルカメラで記録する。</p> <p>(2) プリントアウトした写真に手書きでコメントを加えたり、プレゼンテーションソフトを使って加工したりして、掲示物を作製する。</p> <p>(3) 教室の「デジタル日記コーナー」へ常に一番新しい掲示物を貼る。</p> <p><朝の時間（毎日）></p> <p>(1) 日直の児童が写真に関するプレゼンテーションを行う。</p> <p>(2) 写真の写し方や写っているもの・話の内容等に関する質疑応答を行う。</p> <p>(3) 写真や話し方について教師がコメントをする。</p> <p><学年末（授業参観）他></p> <p>(1) 全児童が、一年間を最も分かりやすく伝えられる写真を一枚選び、プレゼンテーションを行う。</p> <p>(2) あらかじめ決めた視点に基づいて一人一人のプレゼンテーションに対して全員で評価を行う。</p> <p>(3) 教師が自ら撮影し、選んだ写真を提示しながら一年間を振り返る。</p> <p>(4) 児童が写した全ての写真と教師が写した写真・ビデオをCD-ROMにまとめ全児童に贈る。</p>	<p>デジタルカメラ フロッピーディスク</p> <p>コンピュータ プレゼンテーションソフト プリンタ 作成した掲示物</p> <p>コンピュータ デジタルカメラ 大型モニタ液晶プロジェクタ 指示棒</p> <p>コンピュータ プレゼンテーションソフト 液晶プロジェクタ 指示棒 1～5の点数札（全員）</p> <p>CD-Rドライブ CD-ROMメディア</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・フロッピーディスクに保存するデジタルカメラを使い、個々のデータ管理を容易にする。 ・児童が写す題材に困っているようであれば、一定期間「特集テーマ」を設けるなどして活動がマンネリ化しないようにする。 ・台数や活動時間に制約があるので、手書きかソフトを使うかは児童の判断に任せる。 ・ソフトの基本的な使い方は、総合的な学習の時間等を通して、身に付けていくようにする。 ・定期的に、掲示物に対する相互評価を行い、掲示物を全員が意識して見る時間を設ける。 ・当番制で一人ずつ行う。担当児童は自主的に準備ができるようにしておく。 ・映像リテラシー・人間関係づくり、共に話題となるように、日頃から意識的に助言をする。 ・話し手のよさを認めながら、今後の活動に示唆を与える。 ・写真を選んだ理由について明確にしながらかたり、友達とのかかわりが想起できるような話題を取り上げたりする。 ・「児童と共に決めた5つのポイント」が達成できているかどうかを点数で示しながら、相互にコメントも加えて進行する。 ・望ましい人間関係の形成に役立った営みを想起しながら、教師が撮影した写真を提示する。 ・児童との営みを通して感じた教師の喜びや感謝の気持ちを伝えられるような、デジタルポートフォリオを作成する。

休憩時間等を活用して

一人一人の児童が学校生活の中で「がんばったこと」「友達と協力して取り組み、成果が上がったこと」「友達のよいところ」等を見つけて、デジタルカメラでその様子を記録した。一定の視点をもたずに「何でもいいから写そう。」という構えで実施してもそれなりに学びは期待できるが、しばしば児童が「何を写せばよいのか。」と、目標を見失うケースも生じた。教師が話題を提供したり「今週は『特集』で行こう」等とテーマを設定したりすることによって、活動の活性化を図ると効果的だった。

その後、撮影したデジタル写真はプリンタで印刷して手書きのコメントを書き加えたり、プレゼンテーションソフトで加工して印刷したりして、掲示物として再構成した（写真1）。本

実践ではフロッピーディスクに記録するタイプのデジタルカメラを活用したので、個々のデータ管理が容易にできてよかった。なお、コンピュータの台数・活用時間に限りがあるので、必



写真1 ソフトで加工した作品（一部）



写真2 デジタル日記コーナー

ずしも掲示物は同ソフトによる加工にこだわらないようにした。

でき上がった掲示物は、教室内の「デジタル日記コーナー」へ常設掲示した(写真2)。新しい掲示物ができるたびに自分で張り替えるようにしたので、お互いの最新の掲示物をいつも見ることができた。そして、掲示物に対する相互評価を行うために、全員が意識して見る時間を定期的に設けたことも効果的だった。こうした取り組みも、一人一人の存在感を大切に考えるきっかけづくりになったと考える。

さらに、掲示物は掲示した後に“ポートフォリオ(クリアファイル)”へ綴っていった。一年間の営みを振り返る際に有効な材料となった。

朝の会・帰りの会を活用して

その日の日直にあたる児童が、コンピュータ・大型モニタ・液晶プロジェクタ等で写真を提示して、プレゼンテーションを行った。そして、全員で写真の写し方や写っているもの・話の内容等に関する質疑応答を行った。児童が映像リテラシーに関する視点も人間関係づくりに関する視点も共に大切にできるように、教師はプレゼンテーションの仕方や写真の写し方についてコメントしたり、児童のよさを認めながら今後の活動に示唆を与えるような助言をしたりした。

学年末の取り組み

最後の授業参観では、一人一人が撮りためた写真の中からこのクラスで過ごした一年間を最も分かりやすく伝えられるものを自分で選び、選んだ理由を明確にしながらかプレゼンテーションを行った。そして、あらかじめ決めた視点に基づいて、一人一人のプレゼンテーションに対

して全員で評価を行った。日頃より大切にしている「児童と共に決めた5つの評価項目(3(2)へ表記)」が達成できたかどうかも点数で示し、相互にコメントを加えながら進化した。よりよい人間関係づくりに役立った営みを想起したり、映像リテラシーの高まりを確かめたりしながら、一年間を振り返ることができた。

その後、全児童が撮りためた全ての写真や教師が写した写真・メッセージビデオをCD-ROMにまとめ、全児童に贈った。営みを通して得た教師の喜びや感謝の気持ちを伝えることができた。

(2) デジタル日記を実践した成果の考察

よりよい人間関係づくりについて

児童が一年間を振り返って書いた文章から、人間関係づくりに効果を発揮したことが認められる表現を、いくつか抜粋した。

「みんながぼくのことをスピーチしてくれたおかげで、ぼくのいいところがけっこうわかりました。自分のことは、なかなか考えてもわからないので、よかったです。」

「くんは、プレゼンテーションの時の言葉が、いつも工夫されていていいなあと思いました。」

「友だちは、私が全然考えてもいないものを写していました。私は、気づけばいろいろなものがあるな、と友だちのプレゼンテーションに感心しました。」

「6年生になった時のクラスの人たちもいっぱい写して、友だちのよさをわかるようにしたい。」

学級の中で一人一人のよさ・存在感をお互いが認識し、大切にするようになったことがうかがえる。また一連の取り組みが「よりよい人間関係づくりに役立った」という自覚も児童の中にあるようで、これからも続けていきたいという意欲を表す記述が多く見られた。

例えば1でも記したように、本学級は当初異性の交流に大変な配慮を要する集団であった。放任すれば水と油のごとく男女別のグループができ、しかも必要以上に壁を作っているように振る舞った。言うまでもなくその雰囲気は徐々に払拭されていったが、例えばA子のような女子は、最後まで自発的に男子へかかわることが



写真3 A子の写した写真(左)とB子がプレゼンテーションをする様子(右)

できずに終わった一人である。A子が一年間撮りためた写真のうち、フレーム内に男子の姿が収まっているものは写真3(左)のたった一枚であった。しかしA子は、最後の参観授業でこの写真を取り上げてプレゼンテーションをした。A子が、一年間を最も分かりやすく伝える1枚にこれを選んだことは、デジタル日記が児童のよりよい人間関係づくりに寄与したことを象徴的に表していると考えられる。

伝えたいことを相手に分かりやすく伝える力の育成について

このことについても、成果の上昇が認められる児童の文章表現を抜粋した。

「デジタル日記をやり始めてから、カメラを使って、どの位置からどんな角度で写真を撮らうのかが、よくわかりました。見やすくそして工夫した写し方ができるようになりました。」

「写真を撮るとき、バックが明るいと本当にとりたい人やものが暗くなってしまうことがわかりました。」

「前は人前でしゃべることが苦手だったけど、日直の時プレゼンテーションをしていると、みんなの前で話すことがとても楽しくなってきました。」

デジタルカメラやコンピュータを「学習の道具」として自然に活用することができるようになった。また、写す目的がはっきりとした写真、相手に分かりやすく伝えようとする写真には、写し方にも工夫が必要であるということを経験的にとらえることができた。特に映像リテラシーの高まりが感じられた。

さらに、児童が苦手にしてきた「伝えたいことを相手に分かりやすく伝える」場面を数多く経験し、それぞれの児童がプレゼンテーション能力を高めることもできた。写真3(右)はB

子がプレゼンテーションをしている様子である。デジタル日記の場面に限らず、人前で話すときの5つの評価項目(口を開けてみんなに聞こえる声の大きさで目・顔をみんなの方へ向けてできるだけ止まらず必要なことをまとめて分かりやすくモジモジ・そわそわしないで)を全員で話し合って決め、意識的に相互評価を繰り返してきた。例えば、相手に分かりやすく伝えるためには原稿を読むのではなく、聞き手の顔を見ながら話すことが有効であるということは、全児童が経験的に理解した。人前に立って話すことへの自信が、こうした評価活動の継続により培われたものと考えられる。

4 おわりに

デジタル日記の取り組みは、よりよい人間関係づくりや映像リテラシー・プレゼンテーション能力の育成に関して成果を上げた。「コンピュータ2台+液晶プロジェクタ1台」といういわゆる「2005年の教室環境」のもとでは、特に有効な「情報活用能力の育成」に結びつく活動となる。こうした趣旨の実践は、活用するソフトや機器が変わっても情報教育の「不易」として定着・普及していくべきではないかと考える。

情報教育は広く普及してきた。今後は小学校においても、「情報手段」の学習にとどまらず「情報の内容や構成」を吟味する学習が必要となってくる(堀田,2001)。このデジタル日記の取り組みも、教師が評価の視点を変えることによって情報を分析的にとらえる学習機会となる。情報の特性を理解した上で情報や情報手段を有効活用できる児童の育成を目指して、これからも実践を続けていきたい。

【主な参考文献】

〔1〕福江義彦(1998):NEW教育とコンピュータ,学習研究社,pp.38-41

〔2〕堀田龍也(2001):「新しい時代の基礎基本としてのメディア・リテラシー」,子どもの学力読本,教育開発研究所,pp.43-46

【謝辞】

本研究は,(財)松下視聴覚教育研究財団・第26回実践研究助成を受け,さらには(株)ファーストの皆様にも多大な御協力をいただくことによって,推進することができました。関係の皆様方に深く感謝いたします。